

「ひとに出会う」を通して学ぶ ESD の価値実現の教育実践の構想Ⅲ

－ コロナ禍における地域フィールドワークの可能性を探る －

吉田寛

(奈良教育大学附属中学校)

中澤静男

(奈良教育大学 教育連携講座)

河本大地

(奈良教育大学 社会科教育講座 (地理学))

佐竹靖・竹村景生・市橋由彬・新谷太一・有馬一彦・山田耕士

(奈良教育大学附属中学校)

The Plan of Educational Practice to Realize the Value of ESD Learned through 'Meeting the people' Ⅲ :
Exploring the possibilities of regional fieldwork in Corona (COVID-19) related chaos

Hiroshi YOSHIDA

(Junior High School attached to Nara University of Education)

Shizuo NAKAZAWA

(Department of Educational Cooperation, Nara University of Education)

Daichi KOHMOTO

(Department of Geography, Nara University of Education)

Yasushi SATAKE, Kageki TAKEMURA, Yoshiaki ICHIHASHI,

Taichi SHINTANI, Kazuhiko ARIMA, Kouji YAMADA

(Junior High School attached to Nara University of Education)

要旨：奈良教育大学附属中学校では ESD の理念を軸に「総合的な学習の時間」を学びの系統性の中に位置づけて学校づくりを行っている。本稿では、コロナ禍のなか、10月に実施した地域フィールドワーク「奈良めぐり」で得た知見を紹介する。多様性・多文化共生を学ぶコースでは、ゲストティーチャーとの対話（ひととの出会い）を通して、外国人問題や障害者に対する視点の変化、さまざまな生き方に触れた。できないと嘆く前に「たくましく、できることを探し、一歩踏み出す人々」との出会いを契機に、まとめを経て「自分ごと化」していく生徒の変容を分析する。

キーワード：総合的な学習の時間 The Period for Integrated Studies

ESD (持続可能な開発の為の教育) Education for Sustainable Development

SDGs Sustainable Development Goals

「ひとに出会う」 Meeting the people

コロナ禍 Corona (COVID-19) related chaos

1. はじめに

本研究は、地域に根をおろして活動されている方々との出会いや語りの傾聴を通して、中学校の生徒自身が ESD の価値観に基づいて主体的に社会に関わる力を身に付け、将来、豊かな社会づくりの創り手としてつなげていくことを目的としており、3年目の研究である。

具体的には、昨年度(2019年度)に引き続き「総合的な学習の時間」の一環として、1・2年生合同による

地域フィールドワーク「奈良めぐり(10月27日実施)」を構想し、昨年度の実践における成果と課題を整理したうえで、取り組みを発展させていった。

昨年度の実践では大きく以下の3つの成果を得ることができた(表1)。

表1 2019年度の実践で得た3つの成果

- | |
|---|
| (1) 個人の取り組みでなく、組織として ESD・SDGs に取り組む(ホールスクールアプローチ) |
| (2) 子どもと地域で活動される方々をつなぐ(ひとに出会う学び) |
| (3) 子どもと教師が共に学ぶ(協働的な学び、学び合い) |

一方、課題としては、昨年度は教員間の制約を設けず、試行的に推進した部分が大きかった為、中学校での3年間を見通した学びの中で「どんな生徒を育てたいか」、そして「その為にすべきことは？」といった、取り組みの前提となる教員間の意識合わせが不十分であった点も否めなかった。

そこで今年度は、あらかじめ1・2年生の教員間で話し合いを進め、これまでの自由度を残しながらも、「学習を通して大切にしたい思い・願い」を意識共有した上で、8つのコースで実践を積み重ねていくことにした(表2)。

表2 学習を通して大切にしたい思い・願い

<p>(1) 豊かな社会の創り手を育てよう。 その為の学習の手だてとして、「地域」「地域で活動される人々の思い・声」に多様な視点から迫り、単に観光地をめぐる奈良めぐりではなく、「ESD・SDGsにつながる学び」を創ろう。</p> <p>(2) 「こだわり」を持つよう。 その為に「問い」を深め、これからの「答えのない世界」をたくましく生きる力を身につけよう。</p> <p>(3) 生徒と教師が共に主体的に学び合い、他者の意見に耳を傾けよう。(2学年合同の協働的な学習)</p>

2. 新型コロナウイルス感染症拡大による影響

2020年2月末から5月末までの新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う長期間の休校措置・外出自粛を経て、学校再開後も検温、消毒、ソーシャルディスタンスの確保等に細心の注意を払う「新しい生活様式」が始まるなか、「With コロナ」のできることを模索が続いている。

奈良教育大学附属中学校(以下、本校)においても、5月に予定されていた2年生と3年生の宿泊行事が共に10月に延期され、行き先変更や学習計画の規模縮小を余儀なくされた。これまで行事での取り組みを核に学びを深めてきた本校の教育活動にとって、今回のコロナ禍は中学3年間を通した「総合的な学習の時間」のカリキュラム編成の面においても、大きな痛手を被ることになった。

社会全体が閉塞感に陥り、身動きが取りづらい状況下で、人々はどのような動きをとれるか。

このような社会情勢のなかで筆者にとって現状打破のヒントとなったのが、興南中学校・高等学校(沖縄県)の興南アクト部が行っている活動である。

沖縄では2019年10月31日に首里城が燃えたあと、現地の中高生がいち早く見学案内ボランティアを、バーチャルで再開したというニュース⁽¹⁾を耳にした。

「なぜ、こんな状態で立ち上がることができるのか。」
それが筆者の第一印象(疑問)であった。

そして同時に、こんな今こそ、できないと嘆く前に、奈良の地でも「たくましく、できることを探し、一歩踏

み出す人々」に出会う機会をつくり、共に頭をひねり、一歩ずつでも未来へ足を進めていくことが必要ではないかと考え、「奈良めぐり」の構想を膨らませていった。

3. 「2学年合同 奈良めぐり」実践の記録

3.1. コース概要

今年度も昨年度に引き続き、8つのコース(うち新規開設3コース)にて1・2年合同奈良めぐりを実施した(表3)。本稿では、限られた紙面の関係上、[C]と[G]の2つのコースの実践について、紹介する。

表3 「奈良めぐり」8つのコース概要(2020年度)

★は2020年度新規開設コース
★ [Aコース] 茶道の歴史を受け継ごう
★ [Bコース] 文化・墨・筆
[Cコース] 観光とホスピタリティ
[Dコース] 共生 奈良シカ
[Eコース] 奈良公園ランドスケープ
[Fコース] 春日山を鹿が喰う!?
★ [Gコース] 共に奈良で暮らす～多様性・多文化共生～
[H(特別支援学級)] 先輩の働く姿・身近な世界遺産

3.2. Cコース「観光とホスピタリティ」

「観光とホスピタリティ」コースは、昨年度に引き続き開設されたコースである。昨年度は外国人観光客やゲストハウスへのインタビュー活動、そして、奈良教育大学で学んでいる留学生との意見交流などの学習活動を行えたが、今年度はコロナ禍で社会情勢が激変し、壁にぶつかりながら手探りでの実施となった。

奈良の観光業は、外国人観光客が訪れない日々が続き、大きな影響を受けることとなった。奈良でゲストハウスを経営されている方の中には、テレワークの職場としての活用や、医療関係者向けの宿泊施設として提供されたりするなど、次なる一手を模索されている方々がおられる⁽²⁾。一方で、外国人の観光客が戻ってこられる日を心待ちにして、ひたすら耐え忍んでおられる方もいる。経営面で事業継続が厳しい状態になっているゲストハウスもあるなか、生徒には興味本位だけにまかせた質問をさせることは極力避けなければならない。そこで、事前学習として、奈良市観光戦略課の方々をゲストティーチャーとして学校に招き、奈良市の観光の現状や課題、現在進めているコロナ禍への対策について話をうかがったうえで、フィールドワーク当日を迎えた。

当日の観光客インタビューでは特に近畿地方と関東地方からの観光客が多く、奈良の鹿や奈良公園を目当てに来県される方が多かった。また、ゲストハウスやホテルなど7軒の宿泊施設の協力を得て、コロナ禍での対応や宿泊者の変化などについて直接お話をうかがうことができた。

表4 学習前と学習後の変化（生徒記述より）

学習前（生徒の予想）	学習後
Go To キャンペーンによる効果はかなり大きいものだと考えていた。	実際には大きなホテルでは宿泊客が増え、経済が潤っていた。 しかし、ゲストハウスなど小さな宿では、その影響で大きな宿泊施設に客が移り、効果が少なかった。
観光業は、「しんどそう。大変そう。」	お客様の笑顔に助けられる。しんどさだけでなく、楽しさがある。
ホテルは客が多ければ多いほど良いと思っていた。	ホスピタリティを重要視し、1組1組のお客様を大切にしたいので、増えすぎも良くない。
数字で出ている課題を把握するのみ。	道路の舗装や駐車場の数など、新たな課題や改善点が見えた。

（表4）の生徒の記述からは、インタビュー活動を通して、観光業に携わっておられる方々の視点が加わったことで、単純に観光業についての調べ学習で終わることなく、「ホスピタリティ（心からのおもてなし）」についても思いを巡らすようになったことが読み取れる。

また、事後学習では、今回の学習を通して気づいたSDGs とのかかわりについて意見を出し合い、「Goal8：働きがいも経済成長も」や「Goal11：住み続けられるまちづくりを」との関係性に触れる生徒が多く見られた。

特に、「住み続けられるまちづくり」では、町家の活用や地産地消といった意見に加え、観光客が再び訪れたいと思えることを大事にしながら、住んでいる人も住み続けたいと思えるような持続可能な奈良について考えていきたい（観光と市民生活の両立）という意見も出された。

3.3. Gコース「共に奈良で暮らす～多様性・多文化共生～」

「共に奈良で暮らす～多様性・多文化共生～」コースは、今年度、初めて開設したコースである。

現在、奈良県に住んでいる外国人は1万人を超え⁽³⁾、今後もますます増えていくことが予想されるが、言葉の問題や文化の問題など、壁に感じておられることは多いと思われる。

1996年の設立から約20年以上にわたって、地域で暮らす外国人の子どもや家族に、日本語の会話や読み書き、生活支援を行っている市民団体「ナラ・ファミリー＆フレンド」の代表を務めておられるアダルシュ・シャルマ氏からは、今回のコロナ禍による緊急事態宣言期間中、地域の公民館が使用できず、週2回の活動が思うよ

うに開けず、影響を受けたという話をうかがった。

また、事前学習では、奈良市立春日中学校夜間学級で外国籍の方々に日本語指導支援をされている小尾二郎氏を中学校に招き、外国人に正しい情報が伝わりにくく、行政支援の手が届きづらい実態が起きている話をいただいた。具体的には、特別定額給付金等の申請において、市町村はホームページ等を通じて案内を掲げているが、その情報にたどり着くことができていない外国人が相当数いるのではないかと、という問題提起であった。

このコースを選択した生徒のうちの1人が、学習を始める前の、コース選択希望調査用紙に次のような言葉を記している。

SDGsで大事にされていることの1つに「誰ひとり取り残さない」というものがあります。世界規模の目標を「奈良」だけで考えたときに、できているのでしょうか。世界を目指すなら、まずは「奈良」から見直して改善していくことが必要だと思います。なので、実際に人の声を聞いて、もっと深く学びたいです。

この生徒が書いているように、SDGsは日本以外の世界のことだけではない。自分の身近な暮らしの延長線上に世界の課題を見つけだすことができるようになってこそ、「自分ごと化」につながる手掛かりがあるのではないかと。その為には、遠い存在だと認識している問題が、実は近い存在であったり、今まで気づいていなかった課題に気づくことから始めることが必要ではないかと考え、学習計画を組み立てていった。

当初は奈良で暮らす外国人に着目することから始めたが、外国人技能実習制度を活用して来日されている方々は、平日の日中は仕事がある為、ゲストティーチャーとして招きづらいことが判明し、対象を、もう少し広く捉えなおすよう方針転換し、「奈良にはどんな立場の方々が暮らしていて、どんな悩みや課題を抱えておられるだろうか。」「豊かな社会づくりにおいて、誰ひとり取り残さない。」という視点をベースに、当日のゲストティーチャーの人選を図っていった（表5）。

表5 [Gコース] 当日のゲストティーチャー一覧

	どんな人	学んだこと（生徒まとめより）
1	元・青年海外協力隊員 吉原由紀子氏（ヨルダン） 反田博俊氏（マラウイ）	・外国での生活を経験したからこそ気づいた、外の世界から見た日本の姿。 ・当たり前は当たり前ではない。 ・何か相談できるつながり（友達）の必要性。
2	日系ブラジル人 奈良県外国人総合相談窓口 ポルトガル語通訳 玉田エミリア氏	・文化・表現の違い。 ・他者との違いを理解して、寄り添う気持ちが大切。

3	コミュニティワーク「コッから」施設長 古木一夫氏	・人それぞれに弱みがある。 ・「障害=かわいそう。」ではない。 ・障害について“不自由さ”と“不幸”は違う。
4	奈良への移住支援まちづくり推進 TOMOSU 中島章氏 池山加奈子氏	・「奈良は好きですか？」 ・奈良の持つ「個性」とは？ ・奈良の魅力を創りだす。 ・多様性を考える。 ・交流の「場づくり」
5	奈良県まちづくりプロジェクト推進課 甲賀晶子氏	・誰もやらないことをやるのが公務員。 ・答えがないから色々なことができて楽しい。
6	イラストレーター兼 ならきたまの雑貨屋「ハニホ堂」店主 尾崎旬美子氏	・奈良県外からの移住者。 ・クラウドファンディングで資金を集めて、「ならきたまおさんぽガイドブック」を制作。 ・王道でない自分らしい生き方。

上記のゲストティーチャーに共通している点は、「問題意識を持ちながら、こだわり・信念(自分らしさ)を持った生き方をされている方々」ということである。

しかし、経歴や職種が多様多様でありすぎた為、生徒の中には点と点が結びつかず、ゲストティーチャーとの対話が進んでいく間に、焦点がぼやけ、まとまりがつかなくなってしまった生徒もいた。

そこで2年生の事後学習では、ゲストティーチャーへのお礼状作成とともに、どんな学びがあったか、生徒の意見を引き出し、整理することに時間を割くこととした。

キーワードとして「多様性」「個性・自分らしさ」「つながり」「壁」「寄り添う」などが挙がり、次のような意見に集約・整理された。結果的に、考えを整理する活動を事後学習に組み込んだことで、「ひととの出会い」を通して学んだことを、子どもたち自身の等身大の身近な言葉で紡ぎなおすこと(SDGsの解釈)につながった。

- ・「違い」を認めあえることができる世の中(マイノリティが過ごしやすい社会)を目指したい。
- ・誰もがしたいことを叶えられる奈良をつくりたい。
- ・「弱みを共有できる社会」をつくりたい。
- ・ボランティアをする側は、自分が出来ることをする。ボランティアを受ける側は、正解を求めてはいけない。
- ・普段自分と関わらない方々と出会ったことで考えが広がり、「自分を見つめなおすことが大切」ということに気づかされた。

なお、事後学習は学年別で実施し、1年生が学年文集

の為の作文とルートマップを作成している間に、2年生はコースごとのまとめ・整理をし、コース紹介のリーフレット制作と学年発表報告会を行った。後述の事後アンケートの結果(図1)からは、1年生よりも2年生が学びを深めることができたことが読み取れる。来年度以降は、事後学習での振り返りや考えの整理(学習のまとめやSDGsとのつながりを考える)についても、2学年合同で行うことが望ましいと考える。

4. 「ひとに出会う学び」と「自分ごと化」の関係性

ESDは「価値観と行動の変容を促す教育」である。しかし、現実問題として「自分ごと化」することは困難を伴う。

中学生段階では、おそらく価値観の変容は起きたとしても、行動の変容まで引き起こすことは稀であると考えられる。

そこで、「ひととの出会い」を通して行動化のロールモデルを示すことによって、具体的な行動イメージをつかむきっかけや刺激を中学生に与えることが、「自分ごと化」を図っていくうえで影響を与えると仮説を立て、事後アンケートでは次の2軸で生徒に質問を投げかけてみた。

まずは横軸として「奈良めぐりを通して、地域の課題が具体的に見えてきたか。」をたずね、ゲストティーチャーからの問題提起や対話を通して、これまで以上に身近なこととして感じ取ることができるようになったかを確認し、一方の縦軸「具体的な行動イメージが浮かんできたか。」では、ゲストティーチャーとの出会いによる学びが、どれだけ行動の変容を促す契機となったかを計る指標とし、グラフの右上に近づくほど「自分ごと化」に結びつけて捉えることができていると考えた。

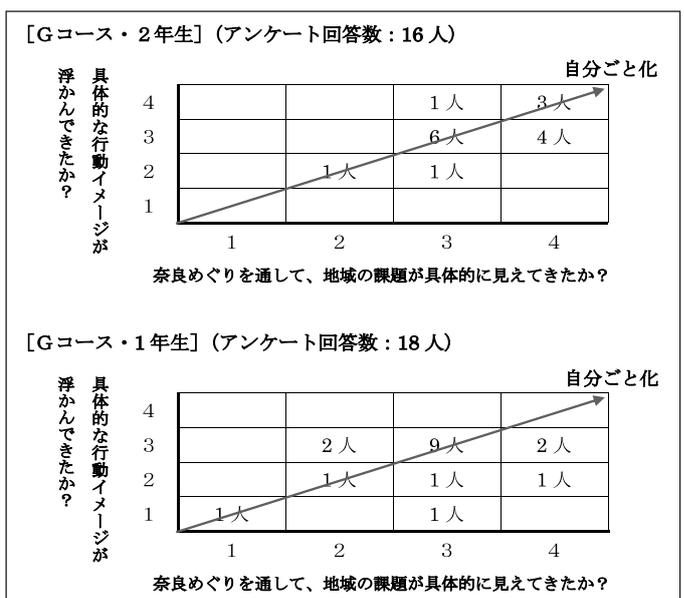


図1 [Gコース] 事後アンケート結果(自分ごと化)

事後アンケート結果（図1）からは、概ね大半の生徒が充実した学びが出来ていたことを読み取れたが、2年生と1年生と比較してみると差が見られた。学年による差は、次のような要因が影響したと考えられる。

1つ目は先述したように、2年生は考えの整理をする振り返りの時間が確保されていたということ。

そして2つ目は、2年生は昨年度に引き続き2年目の学習であり、数名の生徒は実行委員として企画段階から担当教員とともに、どのようなゲストティーチャーに出会いたいのか、また、当日のゲストティーチャーとの対話の進め方等の計画策定においても、中心的役割を果たしていたことが、起因していると考えられる。

なお、事後アンケートでは、「問いの意識や課題を持ちながら取り組みましたか？」という質問も行った（表6）。1年生は、奈良めぐりを何の為に実施するのかという点において、主体的というよりは受動的に、不十分な理解のまま進めてしまったことがアンケート結果から推測でき、コロナ禍による学習時間の縮減が、多少なりとも影響を及ぼしたのではないかと懸念している。

表6 [Gコース] 事後アンケート結果

「問いの意識や課題を持ちながら取り組みましたか？」
（4：大変よく取り組めた。1：全然取り組めなかった。）

	4	3	2	1	小計
2年生	6人	8人	1人	1人	16人
1年生	2人	10人	5人	1人	18人

5. 大学生との協働

本実践は、奈良教育大学の有志学生が「学校フィールド演習Ⅰ」の一環として関わり、生徒実行委員による下見の段階から継続して参加し、本番当日も生徒引率でサポートしてもらった。

Gコースのサポートに携わった2名の学生の感想を一部ではあるが、以下、紹介する。

Gコースは、話を聞く時間が長いので、退屈する場面があるのではないかと考えていたのですが、2年生に聞いてみると、「このように色々な話を聞ける機会はあまりないので面白かった。」と話していて、自分の知らない情報、知らない視点で奈良を見る機会になって良かったのではないかと思います。

中島さん、池山さんとの対話の中で、「奈良は何もない。もっと都会を見習ってほしい。」と話している生徒がいましたが、お話を聞いて、自分で価値を見出す大切さや、自分たちで持続可能な街を作っていく大切さを学ぶことが出来たと思います。今まで持っていなかった視点が沢山得られたのではないのでしょうか。

また、奈良にとどまらず、玉田さん、吉原さん、反田さんの話を聞いて、世界に出ていくことも考えられ

たのではないかと思います。

古木さんの話は、特に子どもたちにとって印象的で、「みんなの幸せって何？」など、たくさんの問いを投げかけてくださっていたので、生活を振り返る機会にもなったと思います。

午後からの活動では、甲賀さんに「住みやすい奈良を創る為に、今の私たちに出来ることはありますか。」という質問が出て、1日を通して、「自分たちで奈良を創っていく」という発想の転換が見えました。その為、この奈良めぐりを通して、学習のねらいであった「将来の地域を担う主権者としての学び」が達成されたのではないかと思います。

今回は下見の活動から見学させていただき、総合の授業の作り方を学ぶことが出来ました。

（数学教育専修 S・C）

今回のテーマであった奈良で外国人との共生をはかることをどこまで学べたかは分かりませんが、私は奈良に住む外国人の方のお話を聞き、もっと奈良を開かれた街にする為には観光だけの街といった概念を壊す必要があると思いました。奈良は観光地である為、どうしても外国人の方を見かけても観光客と誤ってしまい、よそ者感を抱いてしまいます。下見で訪れた中部公民館で、奈良に住む外国人の方のお話を聞き、日本語を学ぶ姿勢や、外国人同士で繋がろうという姿勢を知りました。奈良教育大学にも留学生はたくさんいます。留学生たちも奈良に住む外国人です。まずは、身近な留学生から、外国人が奈良に住むやすくするにはどうすればいいか、を開けたらいいなと思いました。今回の奈良めぐりは奈良という街をどう変えればいいのか、どのような街を目指せばいいのか、それらを深く考えるきっかけになりました。（社会科教育専修 S・Y）

大学生は、教師でも中学生でもない為、どのように関わっていけばいいかと、距離感に悩んだことが推察される。記述からは、大学生が、今回の学びをどちら側の立場からも考え、悩むことによって、自分ごと化しようとしている様子をうかがい知ることができた。

今回、サポートとして関わった大学生には、できるかぎり教師側の手の内を包み隠さずオープンにし、どのようなねらいをもって生徒の学びを深めていくかを伝えつつもりではいるが、将来、学校現場で教鞭をとるようになったとき、今回学んだESD的価値観から捉えなおす行事づくりを是非、実践してくれることを期待している。

6. 成果と課題

6.1. 成果

今年度の成果は、まずは何よりもこのコロナ禍において、「奈良めぐり」を実施できたということである。さまざまな行事を授業振替していく中で、奈良めぐりを「総

「総合的な学習の時間」の1つの大きな柱として学校全体で位置づけ、外部の方々の協力も得て、face to faceの関係（顔の見える関係）を大切にしながら、子どもたちの学びにつなげることができたことは大きな成果といえる。

なお、今年度からは学びのまとめとして、2年生が中心となってコース別のリーフレットを作成し、アウトプットを図ったことにより、学んだことを校内・校外の人々でシェアしやすくなったという利点も生まれた。

ゲストティーチャーとの関係性は、専門家に詳しい話をしてもらっただけでなく、「なぜ、そのゲストティーチャーがそのことにこだわりや信念を持っているか。」まで迫る活動を通して、共に学びを深めるパートナーシップ関係の段階まで、徐々にではあるが築きつつある。

社会に開かれた教育活動という点において、今後も社会全体で教育を支えていく仕組みを構築していきたい。

6.2. 課題

昨年度からの懸案事項として、「総合的な学習の時間」と「教科」の接続を意識したうえで、カリキュラム・マネジメントに努めていくことが挙げられていたが、結果的にコロナ禍で行事の組み換え等が発生し、3年間を見通した「総合的な学習の時間」の全体像はこれまで以上に見通せなくなり、教育活動を関連させる難しさが改めて浮き彫りになった。

点と点のように途切れるのではなく、つながりを意識しながらESD的価値観の育成を、「総合的な学習の時間」を軸にしながら推進することが求められる。

その一翼を担う手法として「ひとに出会う学び」は有効的であると考えますが、対話を楽しむだけに留まらず、その人がこだわりを持つ背景まで迫ることについては、今後もさらなる研究と実践の積み重ねが必要である。

なお、今後研究を深めていく上で大切にしていきたいことは、お互いのケアや、寄り添う気持ちである。多様性を認め合い、多文化共生社会を創っていく上では「支援する側・支援される側」「日本人・外国人」という二極の関係性で見えていくのではなく、「対等な関係性の中で、人と人とのつながりを伴う、公正な社会を創っていく視点」が求められる。これからも学び合いの積み重ねからESD的価値観が培われ、豊かな社会の創り手が一人でも多く育っていくことを願っている。

謝辞

本研究を進めるにあたり、各コースのプランニングには関係各位のご協力を得た。この場を借りて厚く御礼申し上げます。[Cコース] 奈良市内の宿泊施設の皆様（ゲストハウス神奈寝、ゲストハウス桜舎、奈良町宿 紀寺の家、ホテルアジュール奈良、江戸三、登大路ホテル、ふふ奈良）、くるみの木（鹿の舟）、氷室神社、吉岡祐輔氏・

青柳信吾氏・田中久美子氏（奈良市観光戦略課）、奈良市奈良町にぎわい課、奈良県地域振興部観光局 ならの観光力向上課、奈良県観光局 外国人観光客交流館、おちゃのこ、[Gコース]アダルシュ・シャルマ氏（ナラ・ファミリー&フレンド）、小尾二郎氏（奈良市立春日中学校夜間学級、奈良教育大学ボランティアサポートオフィス）、反田博俊氏・吉原由紀子氏（元青年海外協力隊員）、玉田エミリア氏（奈良県外国人支援センター内 奈良県外国人総合相談窓口 ポルトガル語通訳）、古木一夫氏（社会福祉法人こぶしの会）、中島章氏・池山加奈子氏（一般社団法人TOMOSU）、創業支援施設 BONCHI、尾崎句美子氏（ハニホ堂）、甲賀晶子氏（奈良県県土マネジメント部まちづくりプロジェクト推進課）、嶋田智沙恵氏・柴田侑人氏（奈良教育大学 学生）。

注

- 1) 沖縄タイムスプラス（2019年11月4日）、「焼失しても首里城の魅力伝えたい 沖縄の生徒が「バーチャルガイド」大阪の修学旅行生に」。
<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/493102>
- 2) ならしみんだより（2020年7月号）、「ゲストハウスをテレワークの職場へ。地域のつながりを生かす新しい観光産業のカタチ」, No.1196, pp.4.
- 3) 2017年法務省資料によると11,921人

参考文献

- 吉田寛・市橋由彬ほか（2020）、「「ひとに出会う」を通して学ぶESDの価値実現の教育実践の構想Ⅱ－ESDの価値観の根っこに迫る「総合的な学習の時間」の具体化に向けて－」, 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 第6号, pp. 257-264.
- 榎井縁（2019）, 「第8章 多文化共生のまちづくり」, 『SDGsとまちづくり』, 学文社, pp. 148-162.
- 太田満（2016）, 「第9節 排外主義（ヘイトスピーチや反ムスリムの風潮など）に対抗する多文化の共生をめざす社会科の授業とは」, 『社会科教育の今を問い、未来を拓く』, 日本社会科教育学会編, 東洋館出版社, pp. 138-152.
- 日本文教出版（2020）, 「奈良県の外国とのつながり」, 令和2年版小学校社会副読本『奈良県のくらし』, pp.152-155.
- 毎日新聞出版（2019）, 「働く外国人の受け入れ拡大」, 『Newsがわかる2019年1月号』, pp.14-17.